
~碎牙~

武泰斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「碎牙」

【Zコード】

Z8444Y

【作者名】

武泰斗

【あらすじ】

魔法と冒険の時代、大国アトモスにある「王立第一魔法学園」である少年と少女の再会から物語は動き出す。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。 隨時更新予定

本編で語られないキャラ設定もあります。
ただし、ネタバレ注意

人物紹介

ゼノ・アルフレイン

物語の主人公

髪の毛：灰色

瞳の色：青

適正属性：無し

十歳のときに両親が失踪したため、伯父であるジンに引き取られた。それ以来クローゼ村でそれなりに幸せに過ごしてきた。

幼少時代に周りからいじめを受けていたため、他人を貶める人間が大嫌い。

サンドラ・ルミール

ヒロイン

髪の毛：赤

瞳の色：黒

適正属性：水、樹、雷

ゼノの幼なじみで彼と再会を誓った女の子

幼い頃から魔法を使うことができたために、当時は周りの子供達に避けられていた。

成績優秀で、さらに美人で性格も良いため、友人関係は良好。三種類の適正属性をもつ。

学園では「紅嵐」と呼ばれている。

ジン・アルフレイン

ゼノの伯父

髪の毛：茶色

瞳の色：青

適正属性：火、水

ゼノの育ての親的存在元冒険者で剣術と攻撃魔法が得意、現在はクローゼ村で狩人をしている。

「おじさん」と呼ばれるのが嫌い。たとえ甥っ子にあたるゼノに伯父さんと呼ばれるのも嫌。ちなみに39歳……おじさんじゃん親と村に捨てられたゼノを引き取つたが、それ以来娘がゼノにベツタリるのが悩み

ミリア・アルフレイン

ゼノの義妹？

髪の毛：茶色

瞳の色：翠

適正属性：水

ジンの娘、始めてゼノと会ったときに一目惚れしたらしい。ちなみに当時7歳。もちろんゼノは気付いて無いが……。父親譲りの剣術と母親譲りの治癒術の才能を持っている。

義妹となつているが正確にはいとこ。

ミランダ・アルフレイン

ジンの奥さん

髪の毛：水色

瞳の色：翠

適正属性：水、樹

誰にでも優しく料理も出来る美人な万能奥様。ただし、話題が年齢に関するものになると修羅と化す。

村に来たばかりで傷心していたゼノが最初に心を開いた人でもある。ただし、ゼノに自分のことを母さんと呼ばせるのに一年以上か

かつた。

村長

クローゼ村の村長
以上！！

スズカ・イスルギ

学園の先輩
髪の毛：黒
瞳の色：黒
適正属性：火

東の最果てにある大和出身。とにかくテンションが高い。中等部の2年から第一魔法学園に編入した。一年ほど前から北地区にある喫茶店でバイトをしている。

世話好きで優しい性分だが、テンションの高さのせいで台無しになっている。

カワライイものにめがない。ちなみに一つ下の学年に妹がいる。

シムジウ・ハング

ギザ野郎

適正属性：火、風

自分の嫌いな人物を思い出してみよう。それが彼の外見だ！！
ちなみに名前を逆から読むと……

プロローグ

「本当に行つちやうの？」

少女は泣きそうな眼で田の前の少年にたずねた。

「仕方ないよ、俺みたいな役立たずを引き取つてくれる人なんて他にいなかね…」

少年は少し困った顔をしながらそう答えた。

「違うよ！ゼノは役立たずなんかじゃない！村の皆がゼノの良さを理解してないだけだよ…」

「俺の良さ？そんなの存在しないよ、頭も悪いし魔法の才能も無いし、それに何より…」
少年…ゼノは俯きながら呟いた

「あんな最低な親達の息子何だから…」

「…でもそれはゼノのせいなんかじゃ…」

ゼノの両親はつい先日、ある事件を起こして失踪した。

……たつた一人、十歳になつたばかりのゼノを残して

「それに村の皆が言つてるよ、『お前みたいな落ちこぼれが村に居座ること自体間違いだ』って」

ゼノには魔法の才能が無かつた、それどころか、ひとりに最低一つはあるはずの魔法の『適正属性』すら無いため村の同年代の子供達

からいじめを受けていた、また、彼の両親は息子にほとんど興味を示さず、彼とともに会話を交わすことすら無かつた。

ただ一人、目の前の幼なじみだけが彼の唯一の味方だつた。

「でもゼノが居なくなつたら、わたし……」少女は涙を流しながら力無く呟いた

「大丈夫だよ……サラならきっと俺がいなくてもやつていけるから。」「？」

「でも！」

「サラには魔法の才能がある。だからきっと、他の皆ともすぐに仲良くなれる。……もう俺を庇う必要も無くなるしね。」

ゼノは、俯いて泣いている少女・・サラに微笑んだ

「俺さ、向こうに行つたらおじさんに剣術を習つてみるとしたんだ。」「？」

「だから約束するよ！ 次に会つまでに絶対に強い剣士に成るからさ、楽しみにしてよ……ね？」

「グス……わかった。でももう一つ約束して……」
サラは涙を拭いながら言つた

「絶対に……絶対につかわたしに会いに来て。」

ゼノは笑顔でそれに頷いた。

「小僧、そろそろ時間だ。」「……はい、わかりました。それじゃまたねサラ……」

「またねゼノ……」

ゼノはサラと最後に微笑みながら別れの挨拶を交わし、魔動車に乗り込んだ

「挨拶はすんだか?」「

運転席で男が尋ねた

「うん」

「じゃあ行くべや」

走り去つていく魔動車をサラはこいつまでも眺めていた

「ねえおじさん」「おじさんじやねえーお兄さんだー…………」「メン。

お兄さん

「なんだ?」

「向いの向田ぐらー着ぐの?」

「……だいたい二田ぐらーだ。」

「そつか、遠いね……」

「だからよお、こつまでもそんなひでえ顔されたらこいつが参っちまうからよ、こまのつちに泣いておけ。」

「…………グス、うわああああああああああああ…………」

ゼノの悲鳴のような泣き声が草原に響き渡つた。

1話 五年後（前書き）

初投稿の作品なので、へたくそな文ですがよろしくお願いします。

1話 五年後

「side...ゼノ」

「うーん。」

朝か、なんだか懐かしい夢を見た気がする。故郷の「ハング村」を旅立つたときの夢か…

もうあの日から五年も経過したのか、はやいもんだ、あれつくり幼なじみのサンドリとは一度も会っていない。

「まあ、俺のことなんてもう忘れているかもな…。」

それに気まずいんだよなあ、あのときの約束破つちゃったし

「ゼノ~~~~~朝ご飯できたからそろそろ起きなさい」

下から母さんの声が聞こえた、そろそろ起きよ。

リビングにおりたら見知った茶髪の男性が声をかけてきた

「おー! 起きたかゼノ」

「おはようおじ! 「ああん!」…父さん」

「この人は「ジン・アルフレイン」五年前に俺を唯一引き取ってくれた人で、恩人であり育ての親でありそして、師匠でもある

ちなみに俺を捨てた父親の弟だから俺の伯父なんだけど「おじさん」と呼ぶと小さつきみたいにキレる……今年で39歳のくせに

「まつたく、最初からひびき呼べばいいんだよ」

「ははは…」

「おはようひせりー」

キッチンから女性の声が聞こえる

「おはよひめむわふ」と

「この人は「ミランダ・アルフレイン」ジンの奥さんで俺の育ての親。よそ者の俺を快く受け入れてくれた頭が上がらない人の一人だ。

「まつたく、オレの」とは今だにおじさんのへせヨリミランダには母さんかよ」

「いや、でも父をひて呼ぶとたまに怒るじやん」

「オレが?んなこたあない。だからひやんと父をひと呼べ。」

よくこいつよ…まあこいや早く席につこう。と思つたら少しあの影が背後から突貫してきた。

やべ、変な声でた…

「おはようーゼノにーーー！」

「グボア」

「おはよっ……、朝から元気だねミコア」
この少女の名前は「ミコア・アルフレイン」元々この家の娘で今年
で12歳、五年前俺がこの家に引き取られて以来俺のこと兄とした
つてくれている

俺ひとつでは可愛い妹だ。…元気すぎるけどな、まあいいけど

「え~と、ヒーリングコトア…」

「なあ~ここ~」

「そろそろ離れ」「こー…」「…」

「前方から凄まじい殺気が…

「おこ小僧、歯あ食こしばれ。」

「こや、あのと、父さん?」

「誰が!『義父』なんだ!」

「ちよつ~ちつを自分で呼べって…」

「問答無用」「アスー」「サア~

「わあい飯こするわよ」ミコア、もう少しむかひやんを離してあげ

なあ~。

「はあ~こ~」

母さんの手には角に血糊が付いたまな板がぶら下がっていた…まあ
いなび…

「それにしても一人共今日から王都に行ひやうのか……寂しくなるわね。」

「うん……俺も今回よひやく編入試験に受かつたからね。」

そうだった、今日から王都にある魔法を学ぶための学校「王立第一魔法学院」に通うために王都に旅立つんだった。

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて発動することができる術のことで魔術ともいづ

そして魔力とは、生物が持つている生命エネルギーのことで、これが多いほど強力な魔法が使いやすいのである。ちなみに魔力の総量は修行することによつて増加させることが出来る

閑話休題

もちろん魔法の才能が乏しい俺にも魔力は存在するため、簡単な魔法なら使うことができる。はずだ。

ちなみに試験には今までに3回落ちました……

「やつしょえば学年はびつなるの? まさかふたりとも同じ学年?」

「違つよお母さん、あたしが中等部の一年生でゼノニーが高等部の一年生だから別々だよ。……残念ながらね」

「？最後ボソボソと何か言ったか？」

「べ、ベジになんにも…」

あきらかに怪しいな…。まあいにけど

「あらそりなの。でもこきなり高等部からで大丈夫なのゼノ？」

「心配いらぬことよ。むしろ高等部から受けに来る人だつていうぐら
いだし。」

「まあそれにオレが五年間も鍛えてやつたしな ガツハツハ！」

と父さんが笑いながら続けた

ていうか父さん…いつの間にリカバリーしたんだ？

「でもゼノには勉強できないからあたし心配だなあ…。」

いや妹よ、ハツキリと言ひ過ぎじゃね
ていうか妹に勉強の心配されると…………まあべつに……いやよ
くないか。

「まあ勉強できないのは認めるけどその分は実践科目で補つよ。」

「でもゼノには魔法も苦手じゃん！」

「なんだろう、妹は俺のことが嫌いなんだらつか？」

「うひー、ミコトそのへりにしなさい。お兄ちゃんが困ってる
でしょー。」と母さんが割って入ってきた

「いつか母さん、あなたが心配とか言い出したのが原因なんだけ
ど…。

俺は軽くため息を吐きながら荷物をまとめに部屋に戻った。

1話 五年後（後書き）

「意見、ご感想をお待ちしております。」

2話 第一の故郷（前書き）

学園までもまだまだかかりそうですね。

2話 第一の故郷

「こ」は「クローゼ村」、周りを樹海に囲まれた「大国アトモス」にある古びた村である。

その村の入口にたくさんの村人が集まっていた。

「それじゃあゼノ、氣をつけて行つてくるんじやよ。」

「はい、村長！」

「ところで、ミコアは何処にいるのかの？」

「この老人はクローゼ村の村長、村人皆に好かれているおじいちやんである。」

「ミコアならそこで友達と話してゐるよ。」

と、ゼノが指した方では、ミコアが同年代の女友達に囲まれ別れの挨拶を交わしていた。

「ゼノ君ー王都に行つたら氣をつけるんだよー知らない人について行つてはいけないからねー！」

「うん、ありがとうお兄さん」

「オッス！ゼノ、お前がいなくなると狩りが忙しくなつちまーな。」

「うん、『メンおつちやん』

「ハツハツハ！…そんなん気にすんな！それにしてもたつた五年での『どへタれゼノ』がこんなに立派になりやがるとはなあ。」

「こひら、あんた邪魔だよ！…わつわどどきな……ゼノ、つらい事があつても挫けるんじやないよ。それから『リアちゃんの』ことをしつかり守るんだよ！」

「わかりました、おばさん。…それからもう少ししおじさんで優しくしてあげてね。」「

(本当にこの村の人達はいい人ばかりだ！)

(よそ者の自分をあたたかく迎え入れてくれただけじゃなくこんなに別れをの言葉をかけてくれるんだから。)

「そろそろ出発します。準備をしてください。」
と学園行き魔動車の運転手が告げた。

ちなみに「魔動車」とは、百年ほど前に馬車に代わる交通方法として発明された魔力で動く馬要らずの馬車である。利点として、交通速度なら馬車よりも格段に速く、さらに馬の休憩も必要としないすぐれものである。

ただし、重い物を運ぶことはできないため、行商人などはいまだに馬車を使用している。

「」クローゼ村にも魔動車はあるが、学園行きの魔動車は王都で開発された最新型なので、村のそれとは比べ物にならない性能なのである。

ちなみにクローゼ村のような王都から遠くの村や町にいる生徒にはこのように王都から迎えがくるのである。

閑話休題

「それじゃ、ミコアに行こう。」

「うん。」

「ゼノ、ミコア、体に気をつかるのよ。」

「まあアレだ！一人共楽しんでいい。」

「はい。」

「はい。」

「」とミコアは「」とソラに向かって返した。

「それじゃ行きますー！」

「」して一人を乗せた魔動車は王都を目指して出発した。ゼノ

の第一の故郷をあとにして…

「……………」

「……………わしらは名前すら紹介なしなのかの？…？」

3話 魔動車にて（前書き）

さくやく適正属性についての説明が書けました。

3話 魔動車にて

「side・ミリマー

あたし達がクローゼ村を出発してから4日目。

いつも田が沈む前に近くの町で宿をとっているから、夕方の僅かな時間だけだけど、あたしは3日間ゼノにいと一緒に町を探検したり、お店をまわったりして過ごしていた。

その間ゼノにいと腕を組んで歩きまわった。あたしにとつてはちょつとしたデート気分だった。

そういえば、途中ですれ違う人達がたまに、ゼノにいのことを見て小声で「ロリコン」って言つてたけど、どういう意味なんだらう? 聞こえる度にゼノにいは「兄妹です!」って叫んでいたけど…。

それから、泊まった宿は三つ共すつひとつ大きく大きな宿だった。運転手さんに聞いてみたら「魔法学園に遠くから通いに来る生徒のために、学園側が事前に予約をとつておるんですよ。」って言つてた。

そんな感じで王都までの道のりを過ごしていったんだけど…

「なあ運転手さん。」

「なんでしょうかゼノ君。」

「王都には後どれくらいで着くんだ?」

「またですか…。そうですね、おおよそ3時間ぐらいで着きますよ。

L

「うう~一退屈過ぎる...。」

今日は朝からゼノにいはこんな感じで落ち着きがない。最初の頃は魔動車の窓から景色を見てハシャイでいたのに…。どうやら4日目の最終日に飽きたらしい。

「あー、うるさいよゼノにー！」

「ごめん、でもいいじゃん。だけどさも。」

「どうせなら教科書読んで予習してなよ。」

そう言いながら、あたしはカバンから教科書を取り出して、ゼノに
いに差し出した。

「こんな難しいもの読めねえよ。」

いやゼノ、いちねうれせ中等部田だよ。…。

あたしは仕方なく自分で教科書を読む事にした。

「解説！－はじめての魔法学－」

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて意図的に引き起こすことの出来る奇跡である。

誰にでもそれぞれが得意とする属性が存在する。この属性のことを『適正属性』といいう。

第一章

第一節 適正属性

適正属性とは、簡単に言つと魔術師個人に最も適した属性のことをいいう。ここで忘れてはいけないのは「適正属性以外の属性も、簡単な魔法なら使用することが出来る」ということである。日常生活で使われている魔法の多くは、誰にでも使うことが出来る。

つまり、魔術師は適正属性の魔法しか極めることは出来ないが、ある程度なら他の属性も使うことが出来るのである。

第二節 属性の種類

魔法の属性は大きく分けると5種類ある。

「火属性」

主に火を扱う属性であり、細かく分けると、熱と炎などが分類される。

「水属性」 主に水を扱う属性であり、氷や霧、そして怪我を治す治

癒魔法などが分類される。

「樹属性」

主に自然に関係する属性であり、風や樹、そして毒魔法やそれを治す医療魔法などが分類される。

「雷属性」

主に電気を扱う属性であり、雷や磁力などが分類される。

「地属性」

主に物質に関係属性であり、地や鉄、そして鍊金術などが分類される。

以上の5種類が五大属性と呼ばれる、魔法の基本である。



そこまで読んであたしは本を閉じた。

「うーん、やっぱり魔動車の中じゃあ集中して読めないや。…あれ? ゼノにい?」

「……………！」

……いつの間に寝てる。

「ふあ～あ、あたしも既へなつてきちゃつた。」

今内にゼノにいの膝枕で寝よつと

↓ side out ↓

ゼノ達の4日間の旅もついに終わりが見えてきた。

「ほり、一人とも起きてください。」

「ンア…？あれ、どうしたの運転手さん？」

ゼノは眼を擦りながら眠そうに運転手に聞き返した

「ほら見てください。あれが王都の名物のひとつ大城壁ですよ。」

「？？？…………お、おにミコア起きり、見てみろよー。」

「もひ、なんなのゼノにい…？！」

二人の目の前には高さ20メートルにも及ぶ、巨大な城壁がそびえ立っていた。

「スゴい！…横幅もものすごい長い！…」

「キャー！スゴい！スゴい！スゴい！…」

「王都全体を囲んでいますからね。ちなみにゼノ君が住んでいたクローゼ村が軽く100個は入りますよ。」

「えええ！…そんなに広いんですか？！」

「もちろん！王都内には学園以外に、もたくさん施設や住民の居住区、そして宮殿がありますからね。」

「さうか、そういうえば王都なんだから宮殿があつて当たり前か…。いや、でもさすがに100個って…。」

「まあ、クローゼ村はあまり大きな村では無いですからね。とてもあたたかみのある優しい村ですが…。」

と、運転手は続けた

ゼノは少し照れながら笑った。

「スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！…」

「おーい…リリアー！…そろそろ落ち着こうな…。」

しかりしてゐるなりでもリリアはまだ1~2歳の少女なので、始めての王都にハシャイでいた。

まだ外壁なのに。

やうじうじてこむひばん、魔動車は城壁にあるひとつの大門の前にたどり着いた。

「はい、じゃあ次の方 därべ。」

鎧に身を包んでぶしょひげを生やした門番が氣だるやうに告げた。

「やあビスー調子はどうだい?」

運転手が親しげに門番に問い合わせた。

「よお、誰かと思つたらマルコじやねえか!ってことは乗つているのはナシさんかい?」

門番のビスはやまつて親しげに運転手のマルコに返した。

なみに、ここまで頑なに「運転手さん」と通してきたが、そろそろ扱いやすくなつてきたため諦めて前を付けた。

「ああ、だから手続きのせりふを頼むよ。」

「任せとけ！… よし、そんじゃボウズそれから嬢ちゃん、入学証明を見せてくれねえか？」

門番のビスはゼノとミリアに問いかけた。

「ハイ。えっと……あつた！これでいいですか？」

「おうバッヂリだ！ そんじゃ… ほら、こいつが許可證だ！」

そう語りて、ビスはミリアに腕輪を差し出した。

「次から」こいつを見せてるだけで門を自由にぐるるからな。くれぐれも無くすなよ。」「

「ハイ! ところでゼノにい何してゐの?」

ミリアが問いかけると……

「……ヤバイ、入学証明忘れて来た……。」

と真っ青な顔でゼノが答えた。

「ちよつーどつするのゼノにい！入学式明後日だからもう間に合わないよ！」

「ヤバイ…マジでじつじょう…」のまじや父さんにシバき倒され
る…いや待てよ、今回ばかりは母さんまで参戦してくるかも！」

「いやいや、心配する所が違うんじゃないかな？」

マルコが苦笑しながらつっこんだ。

「落ち着けボウズ。アレだ、身分を証明出来るもんがありやあなん
とかなる。」

「本当ですか…!…ってかホントに…!…」

「ああ、毎年オメエみたいな奴が必ずいるからな。此方も救済措置
ぐらい用意してる。」

ゼノは急いでカバンを漁ると中から一枚の金属製のカードを取り出
した。

「じゃあこれで…!…」

「だから落ち着けって…。おお、『ギルドカード』じゃねえか。」

ギルドカードとは、冒険者がギルドに所属していることを証明する
カードで、個人の名前やレベルが記載されている。

ギルドやレベルについての説明はまたいずれ。

「ボウズ冒険者だったのか？どれどれ…………」

「……あ、あの～何か問題でもありましたか？」

ゼノが恐る恐るきいてみると

「…………いや大丈夫だ！えつと名前は『ゼノ・アルフレイン』だな、えへと……お！ちゃんと名簿に名前が乗っているな」

「そんじゃあ……ホレ、ボウズの分だ。とにかく……」

ビスは腕輪を渡しながらゼノに問いかけた。

「学園に通っていた訳じゃねえのに、なんでギルドに冒険者登録してたんだ？」

「べつに大した理由じゃないですよ。故郷がド田舎にあるから、冬の間はそれぐらいしか稼ぐ方法が無いんですよ。あと修行も兼ねて。……いうか学園とギルドって何か関係あるんですか？」

「ああー授業の一環としてギルドでクエストを受けてるからな。もつとも、高等部からだが。」

「さてと、ボウズその腕輪絶つつつ対に無くすなよー。」

「う、わかりました……」

「うして一行を乗せた魔動車は門をくぐつてこも、みちやへ王都への旅に終わりを告げた。

走り去つていいく魔動車をビスは眺めていた。

「あの灰色の髪の毛にあのギルドカード、……あれが噂の『牙折り』か。」

門番の弦きは風に流れれて空に消えていった。

3話 魔動車にて（後書き）

王都到着。……………何時になつたらヒロイン出でてくれるだろ？。

4話 王都到着

ゼノとミコトは、運転手のマルコに別れを告げ、学園を目指して歩いていたが - -

「それにしても……スゴいね。」

「ああ、ものすごい広いな。……で、ここは何処だろ? - - わざわざ道に迷っていた。

「王都アトランティス」は、大国アトモスの南部にあるこの国最大の都市である。

都市内は北、南、東、西、そして中央の五つの地区で成り立っている。

ちなみに第一魔法学園が在るのは西である。

ゼノ達は、北の城門から王都入りしたため、現在北地区にいるのだが

「えっと、向こう側が西地区のはずなんだけど……建物が邪魔で進めないし」

彼等がいる北地区は、商人や冒険者がよく訪れるため、あらゆる店や宿が密集しており、迷宮と化していた。

ちなみに冒険者ギルドもここ北地区に居を構えている。

「ゼノにい……お腹すいた……」

「やついえば、昼飯はまだだつたか？」

「じゃない、そこの食堂でメシにしよ。」

ゼノは近くに在つた、少し大きめのキレイな食堂を指差したて言つた。

カウンタロン

「こりつしゃいませー何名様ですか？」

店に入ると同時に、ポニー・テールの女の店員が笑顔で訪ねてきた。

「え、えーと、こ、一名です……」「ただいまカウンター席しか空いてませんがよろしいですかー！」

「ハ、ハイ」それではこちらの席へどうぞ……」

二人は店員の勢いにおされながらもあとに続いた。

「こりつしゃいませ。ご注文が決まつたらこちからへお声をおかけください。」

カウンター席に座ると、正面からダンティな男の店員が声をかけてきた。

「すいません、その前に少し聞きたいことがあるんですが良いですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

ダンティな男は渋い声で答えた。

「えっと、第一魔法学園に行きたいんですけど道に迷ってしまって……。ようしければ道をききたいのですが……。」

「なるほど。王都に来たのは始めてですか？それなら「あれ！君達魔法学園の生徒なの！？」

ゼノとダンティが会話をしていると、先ほどの店員が勢いよく割り込んできた。

「ええ。先ほど王都に到着したので学園に報告に行こうと思つていて……あなたも第一魔法学園の生徒なんですか？」

「 もうひんー 明後日から高等部の2年になるのよー。」

ゼノの聞こに店員は元気に答えた。

「それならスズカさん、もう少しで今日のバイトは終わりですが、彼等を学園まで案内してあげてはどうですか？」

ダンテイはエエ声勘人並の渋い声色でそう提案した。

「そんな… やすがにもうしわ「それはこ…考えね…そ…うじましょ
う…」け…な…い?」

スズカと呼ばれた店員は即断した。

「いえ、でも「いけない!…注文が入つたんだつた!」 それじゃまた
後で…!…こ…つちやつたよ。」

「お腹すいた……。」

れつやからまつたく会話に参加してなかつたミリアが呟いた。

- - - - -

「…」「…」

「それではお会計は合計1,000円です。」^{ハーフ}

ゼノは財布から500と書かれた金貨を一枚取り出した。

「それでは、ちゅうど1,000円いただきます。 ありがとうございます。 ありがとハーフを
いました。またのじ来店をお待ちしておつま「あー…それじゃ行き
ましょ…!… お疲れさまでしたバイトリーダー!…」…お疲れさ

までしたスズカさん。」「

「言わせてあげようつーーあと一文かべりこ言わせてあげようつーー。」

ゼノは腹の底から声を張上げてツッコムをいった。

「……おのれじやん、バイトだつたんだ…。」

ミコアはボソッと呟いた。

5話 特別版（福井版）

かわやへ公園に着きました

5話 学園まで

「side・ゼノ」

食堂を出てから俺達は、北地区の『ゲート』に向かつて行った。

そもそもクローゼ村の100倍以上の広さの王都を、歩いてまわるのは無理があるそうだ。……冷静に考えればたしかにそうだ。

そこで都市を行き来するために用いられるのが、「魔術式転移門」通称『ゲート』だそうだ。

「ゲートは大昔に存在したと言われている『時空間魔法』の研究中に偶然実用化に成功したという、王都が誇る大規模魔法陣なのよ！」

「！」

と、さつきスズカさんに質問してもいよいよ説明された。

しかもドヤ顔で……けつこうういらつときた。

「ゲートはそれぞれの地区に3つあって、それを使って都市内それぞれの地区に行くことが出来るのよ……」

と、ドヤ顔のまま続けてきた。

どうでもいいけど毎回あんな大声をだして疲れないんだろうか？

そして現在 - -

「ほらー！あそここの店が雑貨屋でそっちの店が防具店よ……あ、心配しなくても西地区に行けばもつと可愛いお店もあるからね……今度いつしょに行こううね！」コアちゃん……

「あの……その……あつひ……」

「妹が、ものっそい勢いで絡まれてます。
どうしてこうなったんだつけ……？」

（回想中）

「それじゃーまずは自己紹介から！私はスズカ！スズカ・イスルギよー！出身は東国の大和！『杖』はこの扇子！それからー」

と、やはつこちが何か喋る前に、一方的に情報をぶちこんできた。

「……でー！趣味はーーーあとーーーはーーーでー！そういうば最近ーー
「もう大丈夫ですーーー」

「そう？まあ私だけが話してもしょうがないもんねー！」

すでに十分過ぎるぐらいにしゃべり倒してんだらうがーーー

と内心思っていたけど

「ええ、そうですね。」

「この時まったく態度に出さなかつた自分を讃めてあげたい。」

「ゼノ・アルフレインといいます。 明後日から高等部の一年になります。」

「じゃあ私の方があ姉さんなんだ!『スズカお姉さん』って呼んでね!—」

「いえ、さすがにあれなので遠慮せさせていただきます。」

「そ、そつ……。」

あれ?ちよつとへこんでる?

「まあ、そこはこれから話しあっていけばいいか…。」

そこには諦めてくれ!

「えつと、じゃあスズカ先輩で。」

「先輩? そつか先輩か…それもいいわね!—これからは私のことをスズカ先輩と呼んでいいからね!—」

復活しやがった…。まあいいけど…。

「それじゃ早く続きを聞かせて!—」

止めたのはあなたです。

「そうですね……出身はアトモスのずっと北の方にあるクローゼ村

です。えつと……以上です。」

「え～それだけ!/? もつと趣味とか教えて!~ね」

ね と言われても…

「… ちょっとあなた、いい加減にしてください… わつきから
ゼノに…」いつまどつて!~何なんですか!~?」

「ノルマニア、そんなに怒らなくともいいだろ?」。

妹よ、よく言つた!

「うー、うん…」めんなれ…」

ミコアはしょんぼりして謝つた。

「… か、かかか…」

あれ? ビリ「カワイイ〜!! なにこの娘!~スッゴくカワイイ
!~」

「「え?」

「お前は!~」

「ノルマニア・アルフレインです!~

「今何歳!~?」

「えつと、12歳で…」

「じゃあ中等部の1年生になるんだ!~!」

「あの、はい…」

「私のことは『スズカねえ』または『ねえね』って呼んで……」「それはちょっと……」

「好きな食べ物は！？それから……」

「回想終了」

↓ side out ↓

何故かミリアのしょんぼりした姿と、その前のゼノ「にー」という言い方がツボだつたらしい。

「いい」と思いついた！ 今度私の部屋に遊びにおこでよーー!! つかやんに似合いそうなカワイイ服がいっぱいあるからーー。」

「そういうえば先輩、ゲートって始めてなんですかけど、どんな感じですか？」

さすがにミリアが心配になり助け船をだすゼノ

「え！ そうね… それは見てのお楽しみかなー もうすぐ着くから楽しみにしててね あ行きましたー！」

なんとか救出に成功したようだ。

「…………ミリア、今度から人前では兄さんと呼ぼうな？」

「わかつたゼノに… お兄ちゃん。」

兄妹は約束を交わした。

そんなこんなでゲートに着いた三人

そこには地面に巨大な魔方陣が3つ描かれていた

「ほら！あの魔方陣がゲートよ！ ゲートは30分に一回のペースで起動するようになってるのよ！」

「へ、それにしてもすごい人の数ですね。」

「もうすぐ午後5：30だから東地区の居住区に行く人がほとんどだけどね！」

「あれ？でも真ん中の魔方陣だけ人が少ないね。」

「んふふふ よく気付いたね！一人共氣をつけてね - -
スズカは珍しく少し引き締まつた表情で説明した。

「 - - 南地区は貴族街だから貴族や一部の商人以外立ち入り禁止な
のよ...」

「へえー、なんで南地区に貴族が集まっているんですか？」

「それはね！ - - えっと、あれ！？ ねえ、なんだつたつけ！？」

ゼノの質問に、スズカは何故かミリアに答えを求めた。

「えつ！ いや、あたしに聞かれても…。」

「ところどだからゼノ君…」めん わからぬいや 「

この時ゼノはいまさらだがふと思つた…。

(この人メンドクセー)

無駄話をしてくるうちこじよいよゲートの起動時間になつた。

ゼノ達がいる西地区行きのゲートはそれほど人がいなかつたが、2
つ隣の東地区行きのゲートはとても混雑していた。

「もう少し摘めてください！」「いでつ！ めえ何ひとの足踏んで
んだ！」「ちょっと！ あんた今私のお尻触つたでしょ！！」「えつ
！ ？違う！ 僕じゃない！ 本當だ信じてくれ！！」「 - - - ゼ「い
でつ！ めえ！ …今度はスネを蹴りやがったな！…」「それでは…
ゲート起動！…」

次の瞬間、広場は静寂に包まれていた。

いや、広場自体が変わっていた。

「到着！…さあ学園を目指しましょう！ 学園までは真っ直ぐだ

がら迷う心配は無いけどね！」

「いやいや！ ちょっと待つてください！ 今なにが起きたんですか！」

「一瞬で人の人達居なくなっちゃった…。」

狼狽える一人に対し、スズカは - -

「ああ、大丈夫だよ！ 西地区のゲートに移動しただけだから！」

と告げた。

「あんな一瞬で？」

「これが王都か…。」

と、よくわからない結論を出す一人だった。

- - - - -

「さあ、着いたよ！ ここが第一魔法学園よ！」

目の前には石造りの巨大な建物が建っていた。

「 - - すげえ…。」

「 - - 王都に着いてまだ数時間しか経つてないのに… 一生分驚いたきがする。」

田舎育ちの一人にとって、学園はものすごい迫力があつたようだ。

「後はそこの受付のおばさんに聞いたら学園と学生寮までの地図を
もらえるからねー！」

「あー！はー、わかりました！」

「どうもありがとうございました。」

「どういたしまして！ 何かあつたら何時でも頼つてねーそれじゃ
！またねー！」

そう言つとスズカは去つていった。

「悪い人では無いんだよね……」

「疲れるけどな……」

一人はそう呟いて、その背中を見送つた。

6話 Another side

側面…？？？

側面…？？？

『本当に元気ですか？』

『でもー…』

『もう一つ約束して…』

『絶対にいつかわたしに会いに来て。』

側面…？？？

……………今は？

そうだ、あの時……

「……夢？」

わたしは寝ぼけ眼を擦りながら、部屋中を見渡した。

「…………？」

えっと……そうだ、思い出した。

こじは王都アトランジの東地区にある学生寮だ……

故郷のハング村から三日かけて、昨日の昼間に王都に着いたんだった。

「ハング村か……」

わたしは自分の故郷のその村が大嫌いだ。

小さい頃、わたしは周りの子供と比べて魔法の才能があった。5歳の時に適正属性を調べたら属性が3つある事がわかった。6歳の時にはすでに基礎魔法が使えるようになっていた。

わたしが周りの子供から爪弾きにされたのはその辺だった。

誰もわたしと会話をしようとしたしなくなつた。その内、田も合わせてくれなくなつた。

それどころか酷い時は化物と言われることもあつた……ただ一人を除いて……。

そのくせ、3年前にわたしが第一魔法学園中等部の受験に受かつた
ら周りの態度は一変した。
それまでわたしを除け者にしてた村の子達は途端にわたしに集まつ
てきた。

正直、気味が悪かった。自分のことを打算的な目で見られている気が
がした……あの人気がいたらきっと心の底から喜んでくれたんだろう
な……。

「やめよ! 朝から……。」

「びつやうの夢を見たせいで嫌なことを思って出しちゃった。

「わあ、今日もー口頑張り!ー。」

まあ、学園が始まるのは2日後だけどね。

ガチャ - -

ドアが開く音がしたから見てみると、そこにほのかにそこから姿の見え
なかつたルームメイトがいた。

「おはようー!ナズナちゃん!ー。」

「おはよう! もう血だけどね。」

「えつ、つやー！」

わたしは慌てて時計を確認した。

「ホントだ！ も～何で起こしてくれなかつたのお母さんー。いや、誰がお母さん？」

- - - - -

わたしは北地区にある「オルディンの武具屋」に向かつた。

- - バタン！

「おはよーお爺さん！」

「つるせえぞ赤頭！ ～もつと静かに入れ！ ～それから世間ではすでに『『にんにちは』だボケ！』

この、王都では珍しい着流しを着たお爺さんは《杖師》のオルディンさん、アトランドの知る人ぞ知る名物職人 - - 「誰が名物だ！ ～」

- - もとい名職人

「つたく、久しぶりに顔を合わせたと思つたら……それに若いくせにこんな時間まで寝やがつて……」

「そ、そんなことないですよ…………？」

「その『?』は何だ？……つたぐ、寝癖ぐらに直してからこ。」

「オルティンさんは羨望の眼差しでわたしの赤い髪の毛を見ている。
「何適当なこと言つてんだ！…呆れてんだよクソガキ！…」

「そんなことよりオルティンさん、頼んでいた《杖》は？」

「！」のりへへへへへたぐ！ ちょっと待つてろ！」

そう言つとオルティンさんはカウンターの奥へ入つて行つた。

「！」で《杖》について説明すると、《杖》とは魔術師が魔法を使用する時に使う道具の総称のことで、昔は全て杖を使用してたらその名残らしい。

今では、魔術師個人によつて使用する《杖》は異なり、人によつては剣や盾を《杖》として使用している場合もある。」

「…で、誰に説明してんだ？」

いつの間にかオルティンさんは戻つて来ていた。

「いや、退屈だつたからつい。」

「……とにかく、ほらー。オマハさんの注文通りの仕上がりだ。」

そう言いながら、オルティンさんは木製の長杖を手渡してくれた。

「柳の枝を削つて作った一品だ。クセはあるが、まあオマエさんなら大丈夫だろう。」

「ありがとうー。」

「なあに、構わんぞ。今年からギルドでクエストを受けるんだろう？また何か必要になつたら何時でも注文してこい。前払いしか受け無いけどな。」

「うん！それじゃー。」

「オウー。」

「あ、その前に」

わたしはオルデインさん別れを告げて店を出た。直前で、さつそく新しい《杖》で風魔法を使って寝癖をなした。

「…もうひとマシな使い方をしようよ。」

- - - - -

わたしが上機嫌で店を出ると - -

「これはこれは、ルミールさんではないですか。」

突然ギザつたらしい口調の青年が話しかけてきた。

「……何か用かしら？」

こいつはシムジウ・ハング、名前から解るようにハング村の出身で、ついでに村長の孫だ。

「いえいえ、偶然見かけたので挨拶を思いましてね。」

シムジウは不愉快な声で続けてきた。

「どうも」機嫌がよろしいようですね？」

あんたに声をかけられるまではね……

「貴方には関係ないでしょう？」

わたしは冷たく、そう言った。

「おや、その長杖は？ まさかとは思いますが、またあんな小汚い老人の店で購入したのですか？」

「それがどうかしたのかしら？ オルティンさんはとても腕のいい職人よ。」

「冗談でしょうか？」の僕の依頼を断るような老人ですよ？」

「あいにぐ、オルティンさんは客を選ぶのよ。」

「ふん、」Jの天才の僕以上にふざわしい客がドコにいると言つんだい？」

誰が天才なんだか……3年前に学園に受かる前は散々わたしのことを見物と罵つていた癖に。

「たくさんいるわよ。…それに貴方以上の実力を持っている人はもつといるわ。」

実際にこいつは学年で中堅程度の実力だし、そのうえ今年から高等部になるから人数は倍近くになるというのに。

「つそんなもの！僕の才能が田覚めるまでの間だけだ！」

なにそれ？新しいギャグのつもりかしら？

「…コホン、失礼しました…。どうですか？お詫びにこれから一緒に食事でも。」

「遠慮しておくわ、わざと食べたばかりだから。」

「そうですか。それもそうですね、もう4・30ですしね。」

「それじゃあさよなら。」

わたしはそう言い放つてその場を後にした。

……というかもう4・30だったんだ。朝も昼も食べてないからお腹すいた。

「…………しようかな。」

わたしは「喫茶アルバトロス」と書かれた扉を開け、つとめて

『あれ！君達魔法学園の生徒なの！？』

(……今の声は)

『もちろんー 明後日から高等部の2年になるのよー。』

踵を返してその場を立ち去った。

うん、別の店に行こうー。

- - - - -

「…………た、食べ過ぎた。」

わたしは眩ながらゲートに向かった。

起動まで、あと少し。

あの後近くの食堂で遅めの朝食兼昼食を食べた。あの自称天才との

会話のせいでストレスがたまつてたからヤケ食いしてしまった。
体重は……大丈夫だよね？朝は食べてなかつたし。

そんなことを考えて、いのちにゲート着いたら - -

「もう少し摘めてください！」

- - 今まさにゲートが起動しそうになつていた。つてヤバイ！

わたしは慌てて魔法陣に駆け込んだ、途中で何かを踏んだり、長杖
が誰かにぶつかつた

「いでつーてめえ何ひとの足踏んでんだー！」「ちょっとーあんた今
私のお尻触つたでしょーー！」

ヤバイ、大事になつてる……

わたしは気まずくなり田をそらした。

その時ふと、西地区行きの魔法陣が田に入つた。

「 - - - - -」

あの灰色の髪の毛は - -

「ゼノーーー！」

わたしは咄嗟に叫んだ。けど…

「それでは…ゲート起動ーー！」

その後魔法陣が淡く光り、一瞬で東地区に移動していた。

「警備員さん……」の人痴漢です……」「なつ……だから違う……」「つるさいわね……犯人は皆そう言つたよ……」「さつきからうつせえぞそこのババア……心配しなくてもめえを触るゲテモノ好きなんざ居ねえよ……」「何ですって……」

見間違えだつたのかしら?……でも、もしかしたら……。

それはともかく……

「い」めんなさい。わたしの長杖が当たっちゃつたみたいで……

とりあえず誤解を解いておこう。

- - - - -

「はあ～……。」

その後、次のゲート起動で西地区に行き、1時間近く探し回つたけど結局見つからなかつた……。

「はあ～……。」

わたしあはう一度ため息を吐いた。

やつぱり見間違えたんだ…。

わたしは寮に帰り、部屋のドアを開けた。

「お帰りサラちゃん…もひ、遅いから心配したよ～～～！」

わたしはナズナちゃんに謝ってからベッドに倒れこんだ。

今日は疲れた。

6話 Another side(後編)

6話 はじめてヒロインをだせました。

せんせん帰省しないか……

7話 擦れ違い

「side...ゼノ」

れて、今日の予定はと…

「どうあえず西地区は学園が始まつてから行けばいいか。」

よしー今日は王都の冒険者ギルドに行こう。

「side...サンドラー

今日はちやんと午前中に起きた。

そういうふうに、休暇中にギルドに登録するように言われたつづけ。

よしー今日はギルドに行こう。

「ねえ、ナズナちゃんはもうギルドに登録した?」

「え、そういうふうに忘れてた。」「

「じゃあこれから一緒にいく?」

- - - - -

第一魔法学園の学生寮は十階建ての建物であり、入つて右側が男子で左側が女子に別れている。

また、2～4階が中等部、5～10階が高等部となつていて

ちなみに学生寮は全部で5つあり、それぞれ五大属性の名前を一つずつとつて呼ばれている。

～30分後・『火の学生寮』一階ロビー

「ミコアのやつ遅いな…」

すると、女子部屋の方から

「あらへえつとおはよひざれこます。」

ナズナが降りてきて、ロビーにいたゼノに挨拶した。

「あ、どうもおはようございます。」

「あの、新しい管理人の方ですか？」

と、ナズナはゼノに質問した。

「え？いや、一応生徒ですけど…。」

「もうなんだですか？すいません、制服を着ていなかつたからつい…。」

現在のゼノの服装は、いく一般の冒険者が着る魔物の皮製の茶色いズボンと布の赤いシャツの上に黒いレザージャケットを羽織つたものである。

対して、ナズナは学園の制服である。

「やっぱり制服を着ていないと不味いですか？」

「いえ、そういうわけではないですよ。」

と、それへ

「じめーんーまつた？ゼ…お兄ちゃんー！」

ミコアが降りてきた。もちろん制服姿で。

「お兄ちゃん、どう？あたしの制服

「ん？ああ、よく似合つてる♪。」

「えへへ　とにかく、お兄ちゃんは制服着ないの？」

「せうだな…ちょっとくら着替えてくるわ。えっと、それじゃあ失礼します。」

セツヒツトヤノは階段を上つていった。

「あの、おはよひ「やれこます。」

ミコアはナズナに挨拶をした。

「おはよひ「やれこます。貴女は?」

「はーーーはじめまして、今年から中等部の一年になるミコア・アルフレイインといいます。」

「セツか入学組なんだ。はじめまして、私は高等部の一年でナズナ・イスルギっていうの、よろしくねミコアちゃん。」

「じゅうじょ宜しくお願ひしますナズナ先輩。」
(あれ?イスルギってどこかで聞いたような?)

もううんヤツのことである。

「といふで、入学組つて何ですか?」

「入学組つてこののはミコアちゃんみたいに、中等部の一年から学園に通つている人のことよ。ちなみにそれ以降に学園に通つてている人は編入組と呼ばれているわ。高等部から通つ人もそうね。」

「ナズナ先輩はどうち何ですか?」

「私は中等部の一年からだから編入組よ。」

と一人が話しかけていた。

「「じめーんナズナちゃん！お待たせ！」

サンドーラが階段を降りてきた。

「わあ、遅いよカラちゃん。」

「「じめんね。靴下が見当たらなくて……あらへんの子は？」

「「」の子は新入生のミコアちゃんよ。」

「へえ～新入生なんだ。わたしはサンドーラ・ルミール・ナズナちゃんのルームメイトよ。気軽にカラって呼んでね。よろしくミコアちゃん！」

「「」の子は新入生のミコアちゃん先輩。」

「ねえ、もしよかつたら一緒に来る？都を案内してあげようか？」

ヒカラは提案したが

「すこません、実は今日は寄るといわしあつまして…それと兄もいますし。」

「やつかあ残念。それじゃまたねミコアちゃん」

「ううう」と一人は寮を出でいった。

タツタツタツ……

「お待たせ！」「めん」「めん、ベルトが見つからなくって！」

「遅いよゼノにい、早く行け！」

遅れること5分、ようやく一人も寮を出た。

- - - - -

「ナズナちゃん！あと一分しかない、急いで！」

「もへ、サラちゃんが遅れるから！」

二人がゲートに着くと同時に

「それでは、ゲート起動！」

魔法陣が淡く光だして転移魔法が起動した。

一方、

「ゼノにい、あと一分しかないよ。」

「仕方無い、次の起動時間までその辺の食堂で朝飯食べてようか。」

- - - - -

所変わつて、冒険者ギルド

冒険者ギルドとは、大国アトモス、東国、そして西にある聖皇公国の三ヶ国に支部が点在する「国境の無い冒険者組織」のことである。

閑話休題

「着いた！」

「いつ見ても大きな建物だよね。入るのはじめてだけど。」

一人の目の前には、石造りの建物があった。

高いは4階程度だが一階辺りの面積は、他の建物の2・5倍ほどあ

る。

入口にある「剣と長杖を交差した標識」が冒険者ギルドの紋章である。

二人が入ると、中は騒音が響いていて女性職員が慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたの君達？まだ学生でしょ？」

「？今年から高等部になるので登録しに来たんですけど。」

すると職員は困ったように

「じゃあ、とりあえず一いつ時に来て。」

一人を階段の方へ促した。

階段を上る前にサラがチラリと1階を見てみると、1階は酒場になっていた

一行は2階の受注所にやって来た。ちなみに3階は資料部屋、4階は関係者以外立ち入り禁止となっている。

そのまま奥にあるテーブル席に着くと、先ほどの職員が口を開いた。

「『じめんね、今下の酒場でパーティー間で言い争いになつていると
こりなのよ。』

「なるほど…」

「じゃあ、担当者を呼んでくるからちょっとまつててね。」

そう告げると職員は受付けの奥に歩いて行った。

サラが周りを見渡してみると、近くのテーブルで学園の制服を着た男の子が別の職員に何かが書かれた紙を手渡しているのが目に入った。

そのうち、メガネをかけた男性職員がやって來た。

「お待たせしました。それではこちらの紙に必要事項をお書きください。」

そう言って一人に一枚ずつ紙を手渡した。

紙には名前、適正属性、《杖》の種類などの項目が書かれていた。

「あ、あの質問しても良いですか？」

記入しながらナズナが控えめにきいた

「名前はわかるんですけど、なぜ適正属性や《杖》の種類を書く必要があるんですか？」

「ああ、それは冒険者どうしがパーティを組むときの用意になるし、何より成り済まし防止の意味があるんですよ。」

「成り済まし……ですか？」

「ええ、極希にそういうことをする迷惑な冒険者がいるんですよ。

「

と職員は答えた。

それから暫くして

「よし、書けた！ナズナちゃんは？」

「うん、私も今書けた所。」

「それではお預かり致します。ギルドカードの作製には少し時間がかかりますので」「承ぐださーい。」

「わかりました。」

「それじゃ、上の資料室で時間を潰してようか。」

そつまつて一人は階段を登つて行つた。

その頃一階では、

「！」のクソガキー覚悟はできてんだろ？！」「

灰色の髪の毛の少年が酔っ払いに絡まれていた。

「どうじつこうつなつた……。」

少年は何の面白味もないテンプレなセリフを呟いた。

7話 擦れ違い（後書き）

「意見、」感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444y/>

～碎牙～

2011年12月1日19時55分発行